

本を選ぶ

NO.417 2020年(令和2年)2月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>藍 続

●司書の眼 第39回

●学校給食に関する展示会を観る：宇和民具館

●彩り・・・更正施設・・・

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

藍 続

スウェーデン南部スコネ地方の古邑ルンド。スウェーデン第3の都市マルメからほど近い人口約10万人のこぢんまりとしたこのまちは、17世紀まではデンマーク王の支配下にあったという。10kmしかない海峡を隔てたデンマークのシェラン島との間にオーレスン橋が20年前に開通してからは、マルメとコペンハーゲンはずか15分で結ばれるようになった。

ルンド市内を歩くと大聖堂を中心に古い家並みが続くのんびりとした田舎町に、若い世代がのびのびととけこんでいるように見えるのは1666年創設のルンド大学を中心とする学園都市だからだろうか。大学と連携して技術開発を行う北欧きってのサイエンスパークには、通信機器大手のエリクソン、隣国フィンランドのノキア、そしてソニーなど、一流のハイテク企業が研究開発拠点をすえている。飲料パックで名高いテトラパックもルンドに本社を構えている。

今では誰もが恩恵を受けているBluetooth（ブルートゥース）がここで生まれた技術だという。当初エリクソンが着手した近距離無線技術の統一規格開発プロジェクトに5社が参加し、Bluetooth SIG(Special Interest Group)を設立。やがて世

界規模の非営利事業者団体となって今に至る。だがなぜ「青い歯」なのか。

古代社会から現代にいたるヨーロッパの青について詳述する『青の歴史』（ミシェル・バストウロー／松村恵理・松村剛訳／筑摩書房／2005年）によれば、ギリシャ・ローマの人々にとって、青は不快な野蛮の色だったという。それが今日では青は例えばサッカーのフランス代表チーム（“les blues”）を意味し、日本も侍ブルーを名乗り、イタリアはアズーリと称してやはり青をチームカラーにしている人気ぶり。著者はそうした青の“逆転の歴史”を、聖母崇拜と青、歴代フランス王家の紋章への青の採用、宗教改革以後の倫理規範と青、さらにはジーンズと青など、中世以降のヨーロッパの歴史のさまざまな場面から興味深いエピソードを細かく描き出す。まだ青がその地位を得る以前に、青の名をまとう王はデンマーク王ハーラル（Harald Blåtand 950～986?）しかいないという。デンマーク史料『ロスキレ年代記』に記述があるそうだ。

Bluetoothという呼び名は、このハーラル青歯王のあだ名から取られた。命名したのはプロジェクト参加メンバーの一員インテルの技術者ジム・カードック（Jim Kardach）と伝わる。

青地に白抜きになったBluetoothのロゴマークはとても印象的で、アルファベットのBに見えるし歯の形のようにも見える。よくよく見れば×が加えられているようにも思える。だが実のところは、ハーラル王の名前の頭文字HとBを意味する古いルーン文字✠✷を組み合わせたものだとか。（埜村 太郎）

司書の眼 第39回 —レイアウト変更とストレッチ—

鷹野 祐子

2020年になり、職場の図書室で急にやる気がもりあがってきた。「いままで図書室に来なかった人たちを図書室に来るようにする」という目標を掲げて動き出している。図書室の床面積に対する滞在人数の少なさについては、前々から取り上げられており、図書室にカフェ・スペースを作ることで施設内のランチ・エリアを増やせるのではないかと、連携大学院生の控室と兼用にしようかという案も持ち上がっていた。そこで、予算をつけるから3年後をめどに大きく変えなさい、という検討委員会が発足した。基本構成は、静空間と動空間を分けること。静かに個室的に使いたい人たちと、セミナーやミーティングスペースとして活用させる場所を明確に分ける。そしてランチなどの飲食を可能にしたいという要望があがっている。

飲食について国内外の図書館の対応や掲示について調べてみると、そもそも日本と外国では「軽食」に大きなイメージの差があることがわかった。海外では昔から本屋とカフェテリアを融合させ、購入前の本を持ち込んでいいとか、館内で持ち込みのものを食べてもいいという図書館があった。日本でも徐々にそういう書店が増えているが、しかし、よくよく観察してみると、海外ではこの「持ち込みの食べ物」とは、「乾いていて」「匂いが出ない」果物、スナック、サンドイッチ等をさすので、本や他の人に影響するような汚れやにおいが出ないのである。しかし日本でいうランチとは、仕出し弁当にせよ、カップラーメンにせよ、「汁気が多く」「匂いがきつい」食べ物が多い。これを図書館で食す場合、食べている最中の匂い、汚した場合の掃除や残った残飯などの対応が想像以上に負担になると予想される。実際蓋つきのボトルはOKしていても、飲食を禁止している図書館が多い。いくら職員の要望が多いといっても、ランチを図書館内で食べられるようにしてしまったら、もうショッピングモールにあるフードコートと変わらなくなるのではないかと。いや、実際ランチをする場所がなくて困っている。そんな議

論をこれから1年かけて行い、レイアウト変更をしていく予定である。その本格的な変更の前に、昨年末、親機関の旗振りで照明器具のLED化工事があった。そのついでに開所以来冊子が減って倉庫になっていた大型雑誌書架を廃棄することができたので、現在の図書室にはぽっかりと大きなスペースが生まれた。

どの図書館もスペースを苦心して作り出しているのに、偶然できたこのぽっかりとしたスペースで、さて何をしようか？ということになった。まず、2、3人でモニターを囲んで話ができる小さなミーティングスペースを作った。次に、一人でふらりと来た人がブラウジングできるようにいろいろなイスを購入し配置した。今まで使っていた図書受付カウンターは長テーブルとして窓側に配置し、都会のカフェの2階席のようにスタンドライトを置いた。キャスター付きの縦長ホワイトボードを数個購入し、必要に応じて簡単な間仕切りができるようにした。什器的にはそんなところか。ソフト的な取り組みとしては、新年からライブラリーニュースが発行され、1月末にはNo. 7というスピードで進んでいる。このニュースは主に私ではないライブラリアンYさんが、ひらめきとこれまで培った医学と資料の知識から精力的に作ってくれている。新年最初のニュースは芋づる式読書MAPであった。

この芋づる式！読書MAPは岩波書店さんの岩波新書フェア2019の「つながる ひろがる, 芋づる式！岩波新書」の連動企画 (<https://www.iwanami.co.jp/news/n32672.html>) である。サイトで実際に見てもらうとわかるが、サツマイモのイモのあちこちにキーになる資料があって、それが芋づるでつながっている。アイデアを出すときや思考を整理するときに良く使う連想MAPを想像してもらうとわかりやすいかもしれない。芋づる式！読書MAPの面白いところは、それを作る人によって、思い

もかけない本がつながっていくことだろうか。実際に作ってくれたMAPでは、真ん中が「脳の話」（時実利彦、岩波新書）にはじまり、はじの方では細胞組織染色の本とかマンガ、ユマニチュード入門にまで広がっている。もちろんすべて所蔵しており、原本が展示されている。また何号目かのライブラリーニュースでは、「これも学習マンガだ」（<http://gakushumanga.jp/>）からリストをお借りして、いちおし・読みたいマンガを投票してもらった。マンガということで、研究者以外の利用者も多く訪れ投票してくださった結果、1位2位は「ブラック・ジャック」「火の鳥」（手塚治虫）とド定番であったが、3位は「とめはねっ！ 鈴里高校書道部」（河合克敏）「ピアノの森 -The perfect world of KAI-」（一色まこと）の同点であった。その後も研究所で開催されるセミナーとの連動企画や、無料論文フルテキスト取得プラグインなど多岐にわたる内容のニュースレターが配信されている。

実は図書室改装の折にひそかに差し込みたいアイデアとして、「ストレッチ」「筋トレ」を考えている。加齢や疾患により、筋肉量が減少するサルコペニアについて予防医学的に取り上げられているが、ストレス・マネージメント的にもストレッチや筋トレは効果がある。朝から晩まで研究のことを考えて不健康な生活を送る研究者もいるが、長く継続的な研究生活のために、同好会でのクラブ活動や、ランニング、武道などで体力を維持しようとしている研究者も多い。本格的なレッスンを図書館で開催しなくても、隙間時間でのストレッチができるような仕組みづくりができないか、と検討している最中である。このストレッチについてはすでに電気通信大学さんが、UEC Ambient Intelligence Agora（附属図書館2F）にてリラクゼーションや仲間づくりの場の提供としてストレッチ体験会を開催されている。仕事の合間のストレッチは、「サボリ」ではなく、次の仕事のための「つなぎ」であり「活力の素」である。運動学習分野の研究者並みに筋肉について博学なライブラリアンYさんのサポートにより、凝り固まった筋肉を上手に伸ばし、骨格の柔軟性を取り戻して

また仕事に戻ってほしいと思う。ライブラリアンYさんはTwitterで活動を配信中なので興味あがる人は探してみてください（@biblio_arrietty）。

Do The Hokey Pokey

私の父は7人兄弟で長野の出身である。一つ上の兄と父が同年に亡くなった後、100歳にもう少し、というところで一番上の兄が亡くなったのでその葬儀に行ってきた。一番下の妹、つまり私の叔母がまだ健在なので、今回の葬儀を取り仕切っており、家族葬であるから、という話だった。父の実家は山間にあり、その界限はみんな鷹野さんである。父の実家は、本家があって、しょうやという分家があって、新家というさらに分家にあたるので、本来は本家から全員を呼ばないといけないので、毎回村中の人が参列するような大きな葬儀になるそうだ。数十年前に祖母が103歳でなくなった時には、村のおんしょう（女衆）が手伝いに来て、庭にテントを張って料理や飲み物を用意した葬儀が3日間続き、さらに毎晩そのおんしょうを家族が接待するというエンドレスな葬儀であった。当時まだ元気だった嫁である私の母は、毎晩涙を流しながら働いていた。お坊さんも5名来て、チャラン、ボランと楽器を演奏していたので、東京からきた親類の会社の人が「映画みたい・・・」と言ったとか。また、この界限では毎年「鷹野くるわ」という一族全員が集まるお祭りがあるそうだ。昔は山のでっぺんにある祠に集まって、持ち回りの担当が赤飯や料理を持ち寄り宴会をしていたのだが、今は代表が祠からお水をとってきて、公民館で宴会をするそうだ。しかし地域の高齢化が進んで「それもなかなか昔通りにはいかないんだよね」と叔母がこぼしていた。話を聞いて、そんな同族のお祭りが現在でも継続されていることにこちらがびっくりした。

今回も大勢参列するような葬儀を想像していたのに家族葬なら東京からもいかないと寂しくなるよね、と姉妹で参列したのであるが、長兄には子供3人孫8人曾孫8人がおり、本家としょうやからの代表と私たち甥や姪が加わりにぎやかな葬儀であった。（たかの ゆうこ：医学系研究所図書室）

学校給食に関する展示会を観る：宇和民具館

菅 修一

宇和民具館第21回企画展・東京「昭和のくらし博物館」巡回展「パンと昭和」（令和元年6月22日～12月15日^{注1}）を見学しました。第一部は「パンの歴史」と題した「昭和のくらし博物館」資料の展示でした。第二部は「西予市の給食とパン」と題した宇和民具館オリジナルの展示でした。筆者は昔の学校教科書を収集していますので、学校教育の歴史について関心を持っており、第二部「西予市の給食とパン」について、展示を担当された仙波香菜子さんからお話を伺いました。

なお、宇和民具館は愛媛県西予市宇和町にある、江戸時代末期以降昭和期まで西予市で使用されていた民具を収集展示している博物館です。明治の擬洋風建築の国指定重要文化財で教育資料館となっている開明学校に隣接しています。

1. 文書資料から

仙波さんは地域の小学校である宇和町小学校で昭和30年7月に完全給食が実施されていく様子を同校の『学校日誌』、『給食日誌』、『備品台帳（給食の部）』を読み取り、紹介されました。同資料が開明学校に収蔵されていたので読むことができた、とのことでした。昭和30年7月1日の記述には「本日より給食開始 四年生以上に実施」とありました。そのほか、給食開始直前まで大工さんや左官屋さんが給食室改良工事をし、教員が三角巾作りをしている記述などがありました。『給食日誌』には給食人員が低学年、高学年に分けて記録されていましたが、しばらくの間は高学年と低学年と日替わりで交互に給食が実施されていたこと、給食実施の初日の献立は「きつねうどん」だったことなどが記載されました。仙波さんは『給食日誌』中の献立材料の記載を丹念に見て、牛肉が頻繁に使用されていたことに注目しています。当時、給食では全国的に安価な鯨肉を使用することが多かったはず、ということから注目したそうです。仙波さんは昭和30年代に地元で酪農を営まれていた方にインタビューし、当時、

宇和町では酪農が盛んで（当時酪農家数107～110戸、現在では乳牛と肉牛を扱う牧場1箇所と肉牛を扱う牧場が4箇所（平成30年度現在）、乳牛が沢山いたこと、その中で乳が出なくなったり、種がつかなくなったりした乳牛を廃牛として少し太らせたあと、屠殺・解体し、安価な牛肉として小売販売されていたという証言を得たことを展示で示されていました。昭和46年頃には酪農家は16戸に減少、さらに減少していきます。酪農衰退の原因は、日本がアメリカの余剰農産物の受入国だったことからの国内の牛乳価格引き下げ等、酪農家を取り巻く情勢悪化であったとのこと¹）。給食に関する文書の読み解きが、昭和30年代の宇和町の様子に向かい、酪農を巡る国際関係にまで広がっていきます。

2. 町誌から

西予市は平成16年、東宇和郡宇和町・野村町・城川町・明浜町、西宇和郡三瓶町が合併し、誕生しています。仙波さんは、各町の町誌を読みながら、興味深い事実を伝えています。

明浜町の狩江小学校では、昭和13年から20名程の虚弱児童に対し、牛乳と学校で飼育していた山羊乳を補給したこと、昭和15年から虚弱児に、主食は役場からの特配、副食は各自持参という本格的な給食が実施されていたとの記載を紹介されています²）。

戦後は、昭和21年12月文部、厚生、農林三次官通達「学校給食の普及奨励」が発せられ、全国の学校給食が再出発したといえます³）。当初は「ミルク給食」から開始され、宇和町の宇和小学校では昭和23年から開始、昭和24年明浜町、三瓶町の小学校、昭和25年野村町の小学校と続きます。

もっとも、パン・ミルク・おかずの揃った「完全給食」は、宇和町小学校では昭和30年7月に開始しましたが、三瓶町での「完全給食」は昭和41年になってからです。仙波さんは、『三瓶町誌』の記述「完全給食開始が遅れた理由の一つに、各校PTAの給食に対する関心が薄い⁴」に注目したそうです。

各学校の校区が狭い三瓶町では、児童がお昼にいったん家に帰って昼食を取ることも可能だったことが、「関心が薄い」理由なのかもしれないと推測されました。

3. パン屋さんへの取材

仙波さんは西予市内宇和町、三瓶町、明浜町の小中学校給食のパンを製造している「三瓶製パン所」^{注2)}での製造工程を取材し、展示で報告されています。行程はおよそ次の通りです。①仕込みを開始、配合材料をこね、生地をねかす。②生地を分割機に入れ分割、その後、丸め機にて形を整える。③成形機に通しコッペパンの形に整え、天板に並べ、ラックに載せる。④醗酵室で30分ねかせる。⑤ラックオープンで焼く。(発酵、焼く、冷ます、の各作業、予定個数まで繰り返し)⑥荒熱を取ったコッペパンを消毒済みのオレンジ色のケースに移した上で、高速自動包装機で1個ずつ包装。⑦販売用の食パンなどの一連の作業、醗酵室まで。⑧菓子パンの一連の作業、醗酵室まで。⑨食パン、菓子パン、焼く。⑩配達担当者による学校給食センターへの配達。⑪菓子パンへの装飾作業、袋詰め、販売所への配送。仕込み開始が午前2時30分。学校給食センターへの配達が午前7時00分。一通りの仕事完了は午前9時30分とのことです。

材料は愛媛県から配給され、県が決められた配合で作られていること、パンのサイズ(分量)は学年ごとに異なること(低学年=40g、高学年=60g、中学生=80g)、衛生上の理由でパンの持ち帰りが出来なくなったためパンのサイズが小さくなっていること(昭和30年代の中学生=120g)など、パン屋さんから取材し報告されています。

4. 展示の工夫

宇和町小学校昭和30年「給食日誌」の献立(「月刊学校給食」64巻3号(2013年3月)の給食再現画像も参考にされたとのこと)、仙波さんが実際に食べた記憶をもとにした昭和50年代の献立、令和元年5月27日せいよ西学校給食センターの献立、の3つを、仙波さん手作りの紙粘土模型(写真は昭和30年の献立)で再現し展示されていました。一見すると本物



と見分けがつかない、優れた模型でした。

給食配膳体験コーナーには、トレイ、食器かご、お皿等の器、先割れスプーン、トン

グ、緑色のフェルトで作成した野菜サンプル、給食着などを配置し、給食当番ごっこが出来ると、子どもたちに人気のコーナーであるとのことでした。

5. 終わりに

担当者の仙波さんが文書や町誌を読み込まれ、関係者に取材され、抱かれた疑問を解かれていく過程は大変興味深いものがありました。

私が小学生だった昭和40年代は給食といえば、パンだったのですが、その後、米飯給食の割合が増えたことなど、ご紹介くださった参考文献を読み、わかりました。給食という学校生活の一断片を切り取って、多くのことを学ぶことができました。今回の記事作成にあたりご対応いただきました西予市文化の里施設統括館長の堀内八重さん、展示ご担当の仙波香菜子さんに記して感謝いたします。

(すが しゅういち：花園大学)

注1) 現在展示は終了していますが、好評につき、令和2年6月7日(日) - 12月13日(日)(予定)に再度展示するそうです。

注2) 「三瓶製パン所」は平成31年3月営業を終了しています。展示のための取材は平成29年10月に行ったとのこと。

引用・参考文献

- 1) 身崎とめこ. ララの真実と日本の酪農を壊した脱脂粉乳. 小泉和子編. パンと昭和. 東京:河出書房新社;2017. p. 87-89.
- 2) 明浜町誌編纂委員会編. 明浜町誌. 明浜(愛媛県):明浜町役場;1986. p. 799-801.
- 3) 三瓶町誌編纂委員会編. 三瓶町誌上巻. 三瓶(愛媛県):三瓶町;1983. p. 980-990.
- 4) 同上
- 5) 長井亜弓. 学校給食のコッペパン. 小泉和子編. パンと昭和. 東京:河出書房新社;2017. p. 109-121.

宇和民具館 所在地:愛媛県西予市宇和町卯之町三丁目106番地 開館時間:午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで) 休館日:月曜(祝日の場合は翌日)・年末年始 Webサイト:https://www.city.seiyo.ehime.jp/miryoku/uwachonomachinami/uwa_mingu/index.html [accessed 2019-12-23]

彩り・・・更正施設・・・

神部 京

映画「いろとりどりの親子」から、今回は犯罪を犯してしまった家族がいる家庭について触れていきたい。

元米国海軍将校で、大手石油会社に勤務している父親と、高校数学教師の母親の間には3人の子どもが生まれる。大切に育てた当時16歳の長男が、8歳の少年を殺めてしまい殺人容疑で逮捕された。精神分析医を雇い調べるも問題は見つからず、殺人罪を認めた長男は終身刑となった。事件のあと、家族は住む場所を変え新たな生活が始まったが、家族が受けた影響の大きさは計り知れない。映画の中では、なぜ長男が罪を犯してしまったのか、その原因は明らかにされてはいない。この家族の話がきっかけとなり、子どもと更正施設との関わりについて本を手取る事となった。

『刑務所しか居場所がない人たち』（山本謙司著／大月書店／2018）は、実刑判決を受けた著者が服役した時に過ごした刑務所での出来事や実際に感じたことなどについて書かれている。受刑者の背景は様々だが、地域で暮らすための支援に繋がる事ができていれば、刑務所に来なくて済む人が多かったのではないかということ。また、服役を終えて出所してもどこにも行き場がなく、万引きや無銭飲食を繰り返して戻ってくる人が多いという事実。なかでも知的障害のある受刑者や急速に増えている高齢の受刑者の問題は、こうしたケースがほとんどのようだ。刑務所に戻ることは、ある意味生きづらい社会から守られているという側面も窺える。

日本では刑務所、少年刑務所、拘留所という3種類の施設を総称して「刑事施設」と呼んでいる。少年刑務所は、20歳未満（実際のところは20歳以上の若者もいる）だが犯罪の内容が重大で、懲役または禁固刑を受けた者が収容される施設である。2017年に廃庁となった奈良少年刑務所で、社会復帰を目指した矯正教育「社会性涵養プログラム」に携わった著者が書いた『あふれたのはやさしさだった』（寮美千子著／西日本出版社／2018）は、閉ざされ

た刑務所の様子を知る手立てとなる。ことばの持つ力によって受刑者達の心を耕す取り組みは、悲しみを悲しみとして受け止める感性や、受刑者の人権がより尊重されるように働きかけていく様子が感じられる。生まれつきの犯罪者はいない。加害者である前に被害者であった子ども達は、自分を大切にすることができないでいる。人を人と思わずに罪を犯してしまったということも、社会と決して切り離すことのできない事実として突き付けられる。

少年刑務所が刑事施設である一方、少年院は家庭裁判所から保護処分を受け、非行をやめるための矯正教育を受けながら社会復帰を目指す教育施設だ。『ギヴ・ミー・ア・チャンス』（大塚敦子著／講談社／2018）は千葉県八街少年院での取り組み「GMac (Give Me a chance)」について知ることができる。非行をして少年院に送られた少年達が、動物愛護センターなどに保護された「保護犬」の訓練を行う。よい家庭犬となるための基本的な訓練を受けた犬たちは希望する家庭へ引き取られていく。犬たちは週末、地域ボランティアのサポートファミリーのもとで過ごす。少年院にいる少年と地域の一般市民が顔を合わせることは無いが、一頭の犬への想いを共有することで絆を結んでゆく過程が伝わってくる。

施設の中で子ども達は社会に戻る為の矯正教育に取り組んでいる。しかし、施設を出た後の社会に彼らを受け入れる環境が少ないことが課題として示されている。その一方で『ぼっちゃん』（伊集院要著／扶桑社／2017）は心の拠り所としてのヒントが詰まっている。「ぼっちゃん」という愛称で親しまれている中本忠子さんは、保護司の活動をしながら自宅を開放し、子ども達に無償で食事を提供し続けている。徐々に子ども達が地域の人達と関わりを持つような働きかけも行いながら、一人ひとりの子どもと向き合っている。

罪を犯す犯さないに関わらず、現実苦しんでいる、寂しい思いをしている子ども達がいる。彼らの苦しみからは自己肯定感の低さを感じる場面が多かった。愛してもらい、許してもらいといった関係性や、誠実に関わりを持つことができる大人の存在を問うていかななくてはならないのだろう。

(かんべ みやこ)



「本屋博」～本と本屋の可能性を探って～

その日、東京と神奈川の県境を走る多摩川のすぐ近く、世田谷区の端に位置する二子玉川駅前に広がる商業施設の屋外広場はたくさんの人でごった返していました。40もの個性的な本屋が集まって本や雑貨を販売し、本に関わるトークイベントやライブイベントも行う「本屋博」が1月31日・2月1日の2日間、開催されたのです。

駅から広場へ向かってまず目に飛び込んできたのは、2台のブックトラック。大型バンに本棚を設置し、あちこちに向いて本を販売する移動式本屋です。その先には、机や棚の上に思い思いの本や雑貨を並べた、お店ごとの小さなブースが並びます。自社で刊行した絵本を中心に並べる絵本専門店、机の上にも下にも箱や棚を積んでたっぷり本を見せる古本屋、リトルプレスやZine（個人で自由に発行する雑誌や本）を扱う新古書店、お店のおすすめの文庫本にオリジナルジャケットをかけて並べる新古書店、少部数制作の凝った本を展示する印刷屋の本屋、本は1冊も扱わないけれど本屋や本に関わるイベントに出店しているというエア本屋（オリジナルのコットンバッグなどを販売）などなど、実にさまざまです。

お店の方からは、「初日で予想以上に本が売れて

しまい、2日目の今朝は再び本を持ってきました」、
「今回が初めてのイベントなので、どのくらい人が集まるかわからなかったのですが、びっくりするほど来ていただいて。正直、出店側の我々が一番驚いています。ほかのお店をのぞく暇もないんですよ」などと興奮気味の声を聞くことができました。公式HPの報告によると、2日間で3万3000人もの方が来場したそうです。

この「本屋博」は、この広場のすぐ先に大きく店舗を構える蔦屋家電のBOOKコンシェルジュ北田博充氏の呼びかけによるもので、会場や蔦屋で販売されていた公式ガイドブック『本屋の本当』も、蔦屋スタッフの実行委員会が制作しています。

昨今の出版・書店をとりまく環境は厳しく、書店閉店などのニュースも後を絶ちませんが、一方で独立系の出版社や本屋の創業が盛んになっているようです。自分たちの作りたいもの・売りたいものを世の中に出していく小さな出版社や本屋がスクラムを組んだらどうなるか…、本と本屋と人をつなぐ目的で開催されたこの「本屋博」の活況に、新たな光や可能性を感じました。都会に限らず、地方でもこうした試みがさまざまに行われているようです。（LAS 探検隊）